

# これまでいただいた意見の整理【ディスカッションシート】

- ・ 議論を深めるため、R4有識者懇談会、R5第1回専門家懇談会、地域意見交換での主な意見を簡略化又は統合記載し構造化して整理したもの
- ・ 異なる視点の意見も並列して記載

資料5

## I 役割

### 1 人づくり

#### ① 人材育成

- ・ 県民や移住者のアイデンティティを育む
- ・ 生涯学習のきっかけをつくり、自立的に考えて行動する社会をつくる

#### ② 福祉

- ・ インクルーシブな視点を持ち、一般の方と一緒につくっていくことにより、誰もが利用できて、包摂的で多様性と持続可能性を育む

### 2 地域づくり

#### ① 観光

- ・ その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客につながる
- ・ 観光客などと博物館との結節点をつくるため、博物館の面白さをフィールドと繋ぐ

#### ② 地域振興

- ・ 商業施設、他の文化施設、関連施設・機関との連携により地域活性化の拠点となる
- ・ 施設のマルチユース化や博物館と周辺文化施設と連携して、文化ゾーンを形成する
- ・ 山形という規模感と距離感でどんなことができるか、山形という土地に合ったものかということは考える必要がある

## II 機能（博物館活動）

### 1 基本的な機能

#### ① 収集・保管

- ・ 美術工芸品も含めた地域文化を損失のリスクから守る
- ・ 収集機能の拡充は最優先課題。将来の収集機能の不足への対応も含め、面積的にも余裕のある収蔵庫の検討が必要
- ・ 地域の収集機能を支援し、各機関の成果を共有する

#### ② 調査・研究

- ・ 山形県の魅力を伝え、資料の価値をブラッシュアップし、利用者の興味関心を喚起する
- ・ 博物館を研究施設として位置づけ、先端的な研究成果を反映する
- ・ 学術機関だけではなく、教育機関という両面性を持った博物館活動を行う

#### ③ 展示

- ・ 県民や移住者のアイデンティティを育む
- ・ 観光客に山形を知ってもらいビジターセンターとなる
- ・ 資料の面白さやモノ・世界の見方自体を伝える
- ・ 五感によるモノとの出会いの場をつくる
- ・ インクルーシブ、福祉・医療の視点を持つ
- ・ 重要文化財である教育資料館の位置づけを検討する
- ・ 公開承認施設の検討により他機関所有の重要な文化財を鑑賞する機会を生む

#### ④ 教育普及

- ・ 生涯学習のきっかけをつくり、自立的に考えて行動する社会をつくる
- ・ 教育機関との多様な関わり方を創出する
- ・ 学ぶことを楽しみ、知識欲を満たす場となる体験講座、各種講座、地元 に即した体験等の充実を図る

### 2 対話機能

#### ① 情報の発信

- ・ わかりやすく、プロセスをしっかりと見せ、思いをしっかりと伝える
- ・ マルチユース化、ショップやカフェ・レストラン、大規模な講堂やホール、ユニークベニューとしての活用により博物館の魅力を高める
- ・ 県内博物館等関係機関のデジタル技術の共有等による情報の統一化を図る
- ・ 継続した利用者の確保のため、収蔵資料の新たな魅力や見解を提示する

#### ② 交流

- ・ 県民がいつでも誰とでも訪れることが出来、誰でもアクセスでき、多様な人と一緒に、くつろげる場、公園のような働きを持つ博物館をつくる
- ・ 県民が主体的に博物館について考え、自分たちのものにしていくのだという意識を醸成し、自分たちが主役になれるような居場所をつくる
- ・ 県民の学べる場やコミュニティづくりなど、交流の継続につながる取り組みが必要

#### ③ 多様な主体との協働

- ・ 各地域の県民の意見を十分に伺い、様々な人が参画し、人同士が連携し、外に開いたインクルーシブな組織をつくる
- ・ 大学教授やデザイナーなどの高度な人材を社会の様々なところで共有する
- ・ 各機関が実施する構築された歴史や歴史研究を進める活動が絶えず更新されていくように支援を行う
- ・ 寄付や人材の共有など県内企業の地域貢献の受け皿となる
- ・ 日頃の博物館活動の中からゆるやかなネットワークを形成し、持続的な博物館活動につなげる

### 3 県立としての機能

#### ① 総合性

- ・ 総合博物館として7分野を網羅することにより、統合的な分野を生み、新しい知識をつくる
- ・ リアルとデジタル、データに基づく技術的な学びと鑑賞に基づく感性の学びなど、機能の総合性を持つ

#### ② 県内博物館のネットワーク形成

- ・ 山形県を一つの博物館にとらえ、県博は、各地域の小さな博物館や資料館等を横につなぎ、県内各施設に誘導できるようなプラットフォームとなる
- ・ 地域の各博物館組織のデジタル化や資料データの共有など組織横断的に統一したデジタル化により効率化を図る
- ・ 各地域の博物館の横のつながりにより一緒に課題解決に取り組む、県内全域の博物館の活性化につなげる
- ・ 子どもの利用促進のため、子ども達が楽しめる機会を地域の博物館と連携して創出する

#### ③ 県立文化施設との連携

- ・ 他の県立文化施設との位置づけを整理し、機能を分担する

#### ④ 研究団体、大学等研究機関との連携

- ・ 大学等研究機関との高度人材の共有、研究室の併設など大学との連携等により、創造性豊かに研究活動ができる環境をつくる
- ・ 大学や研究機関と連携した資料の保管・保存対策や修復事業により県内博物館のサポート体制、広域での収蔵スペースの整備を図る

#### ⑤ 災害対応の拠点

- ・ 防災拠点の中心となる
- ・ 各地域の悉皆調査などの地元の方との協働作業により文化財防災につなげる

### 4 実験場

- ・ 様々な企画を試しにやってみる実験場的な場所やプログラムを設定する
- ・ 他の人との関わりの中において取組みをブラッシュアップし、コミュニティの維持やつながる場所となる拠点をつくる
- ・ 小さいラボが無数にあることで結びつきがたくさん生まれ、身近な自分事として、博物館を考えるきっかけをつくる

## III 経営

### 1 人材の確保

- 博物館は「ヒト」がつくっていくものであることから、学芸員の人材育成に取り組むとともに、大学等研究機関との高度人材の共有を図り、外に開いていく組織運営を行い、自己完結型ではなく、連携型の運営・組織を実現する
- 館長、学芸員、事務職員、各職務の専門的力量向上に努め、目的達成のために皆が一丸となり、同じベクトルで仕事をする
- 各部門に常勤の研究職としての学芸員を複数配置し、館の使命に基づく基幹機能の向上を図る
- 学芸員は、来館者・消費者のニーズを直接的に知ることが大事であり、資料とお客をつなぐことを意識する

### 2 財源等の基盤の確保

- 博物館の収益性を担保することで、地域、子ども達、文化財の保存・修復に還元する
- 低廉な入館料を維持するために、外部資金獲得などの支えの仕組みをつくり、支え手と博物館の濃い関係をつくる
- 資料購入のための基金創設の検討も必要

### 3 営業力の強化

- 興味のある方だけではなく、ターゲットを拡大し、間口を広くすることにより、収益向上につなげる
- ターゲットを設定し、機会を逃さず、連続して発信することにより新しい需要を発掘する
- データを集め、学芸員と事務職員が一緒のチームで体系的な誘致活動を実施する

### 4 業務効率化

- 負担を減らし、業務に集中できるように、博物館の経営や運営分野のDX化を図る
- 地域の各博物館の組織横断的な統一したデジタル化により効率化を図る

### 5 評価・検証

- 定量的、定性的なデータを取得し、来館者、非来館者のニーズを探る
- 子どもたちが10年後、20年後にどれくらいきているかというデータを蓄積する
- 社会全体に影響を与えるような博物館になるために、well-beingなど博物館の使命・役割に基づいた目標を設定し、博物館の成果を評価し、改善を図る

## IV その他

### 【検討を進める上で必要な視点】

- 少子高齢化、デジタル化、国際化など今後の社会変化へ対応するため、基本構想は定期的に見直すことが大切
- 博物館は建物ではなく「機能」であり、その考え方のもとで検討する
- 実物があるということはどういうことか、実際に行って触れることの意義について、もう一度考える
- 基盤としての博物館として、現時点での利活用のみならず、後世の人々の利活用に向けて、ふさわしいものを構想する
- デジタル化というのは、課題を解決させる手段であり、デジタル化によって何を指すのか、デジタル化の先にあるものを考える事が大事
- 周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果の向上等、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える
- 県内の方や移住された方のアイデンティティを育むと同時に、観光客にも山形の歴史や文化、自然を知ってもらうビジターセンターの役割を併せ持つ必要がある
- 施設のマルチユース化、複数の施設の集積によりコスト面、運営面で利便性を高める

- 建設エリアには、自然・歴史・文化、利便性、ストーリー、それらの連携について、グランドデザインを描く必要がある
- 新県博の目的を達成するための諸室、動線、広さ、バリアフリー化などの視点での検討が必要
- 利用促進のため、駐車場や休憩エリアなど利用者のニーズを把握し、利便性を高めることが必要

### 【開館に向けた取り組み】

- 博物館の役割を多くの人に知ってもらうため、新博物館開館までの10年間に何ができるかということを考える
- 開館までのプロセスを可視化し、地域を巻き込み、一般の方と意見交換をしながら、思いをしっかりと伝え、ミュージアムをデザインしていく
- 開館までの間にコミュニティの形成を図り、成長し、オープンにつなげていく
- 開館までの変化を見据えて、その中で、リアルならではの、オンラインならではの体験を設計する
- 開館までの10年間に、リピーターや学校団体の基礎データをしっかりと取る

### 使命（社会的存在意義）

～ 県立博物館は何のために存在するのか（存在意義） ～

### 目指す姿

～ 将来に向かっての県立博物館のあるべき理想の姿 ～

### 行動指針

～ 県立博物館関係者の職務遂行上、拠り所とする行動の指針 ～